

<川越市>

【川越市議会 令和3年3月議会】

レポート第3弾

▼市政方針演説の無内容をくり返す「公正」なる川合市長

▼鋭い切り口が見られない、市長に甘い「営業議会」で終わるのか？！

▼ひとり気を吐く小林薫市議の「正論」

史上最低の投票率で辛うじて4期目市長に留まった川合善明市長。

今議会での一般質問は大いに荒れ模様となるかとの本紙予想は外れたようだ。

3月3日から8日にかけて29名の市議が通告した一般質問は、皮肉にも「一般」過ぎる形式的な言葉のやりとりに終始し、まるで市議らも川合市長にならったような市民不在の、弛緩しきった「行事」としての議会を黙認するかのようだ。

本議会レポート第3回目は、そんな中でも、市民の声を熱く代弁し、ひとり気を吐いた「川合市長の天敵たる小林薫市議」の質疑、市長に迫る「気概を見せた柿田有一市議」の質疑にスポットを当てる。

ひとり気を吐く小林薫市議の「正論」

今議会で「市長の政治姿勢について」を表題とする一般質問に立ったのは小林市議と柿田市議の2名だけである。多選自粛破りの市長選、具体性がないままの議会答弁に「市長の政治姿勢」を追及するべき議会は、荒れるどころか、風ひとつないベタ凧（なぎ）の長閑さで、まるで川越市だけは市民の代弁が不要なほど安定した市政のようだ。

だが実情はその逆で、8割近い市民が「市政とは無関係」に居住している奇異な自治体が川越市である。そのことは史上最低の投票率や川合市長の得票数からも明らかだ。78%の市民が「川越市を相手にしていない」という事実は、市長が信を問われるという次元を下回る、議会

政治さえ存在理由を失っている自治体の終末的な腐敗ぶりと言って過言ではない。

これをスクラップ・アンド・ビルド（老朽化した制度を廃棄し新たな機構を創出する）精神で、愚直なまでの飾らない言葉で川合市長の欺瞞を糾弾する小林薫市議は、今議会の一般質問で最も市民の心に届くものだった。質疑の冒頭から「嘘つき市長」を迫及する小林市議の迫力がうかがえる。

小林薫市議

1月24日、川越市長選挙におきまして、川合市長が当選されました。対立候補を応援・支援した私としては、大変残念な結果になってしまいました。本当にくやしい。来年、市制100年を迎えます。この100年の歴史の中で川合親子が28年間、市長の座に就く。

この街は、世襲制を持ってしまった。本当にこれでいいのだろうか。

投票率22.05%、その中で現職が38,465票、対立候補者が24,613票。川合市長は前回、56,597票ですから18,132票減らしたことになります。票の上では当選したかもしれませんが、これは市長の完敗だったと思います。

川合市長の票は13%に過ぎない。川合市長でいいんだという人は、13%しかいない。残りの87%は、無関心なひとも含めて、あなたじゃなくてもいいという数字であったと私は思います。

新型コロナウイルスがなかなか収束しない中で、国会議員が夜の飲食・飲酒。責任をとって離党あるいは辞職するという厳しい立場に追い込まれた人もいます。

国民の世論・意見を考えれば、当然のことだと思います。しかしながら川合市長は災害が起きても現場に行くわけでもなく、万歳をして自宅で寝ていたとか、あるいはコロナウイルス感染が確認され、濃厚接触が危惧される中、公費で酒を飲んでコンパニオンと手をつないでデュエットする。これは国会議員なら辞職問題ですよ。しかし市長を選んだのは川越市長だったから、議会も騒がないし、市民も騒がないから、本当に市長は川越市長といういい職種を選んだ、これは市長のセンスだ、市長は見る目がある。立派なもんですよ。

落語家としても長いキャリアを誇る小林市議は、川合市長の「市長」たる理由を見事な皮肉で論評してみせた。本紙愛読者の川合市長からすれば、常に小林市議と本紙は「市長に逆らう共犯コンビ」なのだろうが、実際にまともな弁舌を振るう市議が川越市議会に稀少なことから本紙が小林市議に注目するのは当然だ。なによりも市議7期という政治家としての経歴は、言葉に嘘がある人間が到底得られない庶民からの信頼の証左である。

質疑に入った小林市議と、川合市長の答弁を追ってみよう。

小林市議

4年前の選挙で市長は、良識ある市民に選ばれたということですが、今回も市長を支持して下さった市民は、良識ある市民という考えでよいのか。

川合市長

私も、そう思っております。

小林市議

あなたに反対票を投じた 24,613 人は、良識ある市民なのか、それとも良識のない市民なのか。

川合市長

大部分は良識ある市民であろうと考えております。

小林市議

4年前の公約にはプロ野球の試合をする野球場建設、義務教育の給食費無償化があげられていたが、今回、この公約がなくなっていた。この理由をお聞かせください。

川合市長

お断りしておきますが、給食費の無償化というのは、前回の選挙のとき無条件で申し上げたわけではありません。給食費の無償化は、国、県、市の連携で実現を目指しますというような表現で出しています。それを前提として答弁します。

今回の公約には、新型コロナウイルスの対応や大規模災害の備えなど、主に非常事態の現状化において、より優先順位の高いと判断したものを上げています。そのため野球場につきましては、今期の公約には具体的に掲げていませんが、初雁公園整備事業を推進する一環として位置づけています。

また学校給食費の無償化は、国や県の財政的な措置が必要であるが、国や県の具体的な動きがないため今回の公約には掲げなかった。



社会認識もできない市長に「優先順位」など判断できない

川合市長はこの答弁で、前回の選挙公約に掲げた給食費の無償化を条件付きだったとした

が、問題はそこではない。給食費の無償化を今回の選挙時の公約に掲げなかった理由を、コロナ禍対応を優先したからだとしたこの答弁こそが、首長としての判断能力の欠如とリーダーシップの皆無を象徴する問題発言なのである。より簡明に言えば、給食費無償化とコロナ禍対応は一体化した問題であることさえ、川合市長は理解出来ていないのだ。

給食費無償化が、貧困世帯のみならず公で子育てを支援し、一般家庭での支出負担を軽減する目的であることなど普通の人たちでもわかっていることだ。

平時であっても負荷に苦しめられる一般市民家庭が、コロナ禍によって一層あえいでいる全国、いや世界的な現状を、川合市長はまったく理解出来ないのである。

「理解出来ていない」のではなく、小林市議に質疑されたことが「理解出来ない」のだ。そもそも政治が主権者のためにあることも理解出来ないからである。さすが「おれ様市長」ここにありだ。優先順位を判断できる政治家ならば「コロナ禍の終わりが見えない中、国と県にも一層の働きかけを行い、給食費無償化への取り組みを進めていきたい」と公約することが当然なのである。ところが川合善明という市長は、まるで国や県が動かないから進まないのだとでもいう言い草で、なおかつコロナ対策と個別の問題だと釈明している。

8割近い市民が相手にしないのも道理である。そして続く小林市議の質疑に、川合市長は政治家としての能力と理解力の欠如に加えて、またしても恒例の幼児性を議会で発揮する。

小林市議

市長に提案があります。来年度の小学校、中学校、特別支援学校の生徒数は 26,626 人。

給食費は 13 億 4797 万円という概算が出てきます。これは市単独ではできるわけがない。

できないのだったら、せめて新入学児童（小学校 1 年生）2,869 人の給食費 1 億 3120 万円の予算でできる。小学校 1 年生に上がる時は、ランドセル、被服費、上履き、文房具等、もろもろかかります。中には机を買ったり、10 万円では上がらないでしょう。

お金がかかる。お爺ちゃん、お婆ちゃんが買ってくれる家もあるでしょう。

また福祉家庭で大変、経済的に厳しい家もあるでしょう。そういうことを考えたら、せめて新入学児童だけでも無料にはできませんか。「検討する」という答弁はいりません。

新入学児童の給食費無料化は、やる気があるのか、ないのか、これについてお尋ねします。

川合市長

少なくとも現時点では「できない」ということです。

小林市議

本年度の補正予算を含めて、一般会計は 1600 億円、その中の 1 億 3 千万円があれば給食費

の無償化ができると言っているんです。「できない」じゃなくて、やる気があればできるんじゃないですか。

川合市長

できないからやりません。

私怨を隠さない「大炎上答弁」

このような答弁を議会で平然と放つ市長に対して、異常というほかに妥当な表現が見当たらない。しかし、川越市ではこれが「公正」な政治家の姿らしい。

少なくとも公の場で怒りの制御も出来ない川合市長は、これまでも小林市議を目の敵に同市議の自宅に公用車で乗り込んできたり、議会中の議場において名誉毀損で訴えるぞと恫喝したりと、およそ他の自治体首長にはあり得ない暴君ぶりを見せてきた。

しかも、川合市長のコントロール出来ない怒りは、小林市議に対する身勝手な「おれに逆らうやつは誰だろうが許さない」とでもいう狂気に等しい怒りで、これほど危険な市長は、やはり全国でも他にはいないのではないか。

そのうえで、上記のやりとりでも明らかなように、川合市長の答弁は支離滅裂である。

小林市議が「できるか、できないかではなく、やる気があるのか、ないのか？」と問い質しているのに、川合市長は「できないからやりません」などと、いつもの幼稚園児の口喧嘩を返すだけだ。市長だの政治家だの（ついでに言えば弁護士だのと）名乗るだけでも凶々しい。

目の前の小林市議が憎いという異常な執念だけで、市議の質疑に「強いて」まともに答弁しないという幼児性と攻撃性。川合氏のような性格では、「やる気があるのか、ないのか」との小林市議の設問に対して、どっちで答えても敗北だと考えるのだ。だから「できないからやりません」などという言語道断の返答で、市議の追及を封じたと、ひとりで怒ってひとりで鼻の穴を膨らませているわけだ（マスクで見えなくて何よりだったね、市長さん）。

だが過去に一度（選挙の時だけ）は掲げた公約の給食費無償化を「できないからやりません」などという、議会と市民を愚弄するふざけた答弁が市長として許されるはずもない。「できないからやりません」とは、4年前から実行する気概もないのに当選目当ての大嘘を公約として吹いていたということだ。多選自粛もしかり、この市長は毎度お得意のウソと尊大な開き直りだけで「市長屋」に勤しんでいたのである。

小林市議が冒頭に指摘したとおり、これが国会議員であれば失言で辞職必至の大炎上答弁である。ところが8割近い市民に相手にされない川合市長だから、全国民からすれば認知度

はゼロである。小林市議の「本当に市長は川越市長といういい職種を選んだ」との論評はまさに正鵠を射る。

市政方針演説の「コピペ」か？あからさまな手抜き答弁

ベテラン市議の面目躍如というべきか、川合市長の急所（自尊心）に痛快なカウンターパンチを見舞った小林市議に次いで、柿田有一市議も冷静で穏当ながら的確に川合市政の矛盾に迫る質疑を行ったと本紙は評価する。柿田市議は次のように質疑の冒頭を切り出した。

柿田 有 一 市 議

市長選の前の4年間を振り返ってみると、災害と新型コロナということで大きな出来事がありました。市長は厳しい指摘を受けたこともあったかと思います。同時に行政の役割、市長の役割、そういったものがクローズアップされた時期でもあったかと思います。

そういったことを考えますと、本来であれば市民の関心が高くなってもおかしくない状況です。行政に関心を向ける、困ったとき、何か起こった時に、どういうふうに行政が助けてくれるのか、それから今の市長や行政が妥当なのかと議論される場所であったかと思っています。

コロナ時代に入って市政と市長の動向と判断、リーダーシップが注目されるはずが、川越市＝川合市政は市民の関心にさえなっていない。つまり、川合善明という人間が市長である必然性がどこにあるのか？とのメッセージを議会に投げかけたうえで、柿田市議は「市長の政治姿勢について」とする質疑に入った。

柿 田 市 議

今回の議会でも多く議員に答えていますけども、改めて市長選挙の結果、全体として、どう受け止め、そして市政に臨んでいこうとされているのか、お伺いしておきます。

川 合 市 長

今回の市長選挙で、コロナ禍が影響している側面がありますが、投票率が低かったことは残念な結果であり、私の考えをお伝えしきれなかった点、ご理解頂けなかった点があったものと考えている。得票数が前回は下回ったことにつきましては、私の努力が足りなかったこと、また多選

に対する批判があり、前回投票された方が投票所に行かなかったことや相手候補に投票されたことも一因であると考えています。

こうした結果から投票して頂いた方の思いを大変重く受け止めるとともに、私への批判から投票場へ行かなかった方、また相手方候補に投票された方の思いにつきましても大変重く受け止めております。決意を新たに初心を忘れず市民の皆様のため、様々な課題に緊張感を持ってしっかり立ち向かい、市政運営に全力で取り組んでまいります。

これでは今議会での市政方針演説とほぼ同じ「コピペ(引き写し)」の手抜き答弁でしかない。

川合市長という人間は、とにかく選挙で当選し「市長の座」さえ手に入れれば、あとはその市長権力を気分次第で振りかざすためだけに「市長屋」を続けてきたのであろう、あからさまに政治そのものをやる気がない。それでいて市の職員の仕事は、自分の家来とでも思っているのか、多くのことを指示したという。

柿田市議

市長は4期目当選されて、職員にどういうことを語られたのかお伺いします。

川合市長

4期目は新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受け、市税収入が大幅に落ち込むことが見込まれ、より厳しい財政状況の中での出発でございますので、まずは行財政改革に取り組み、コロナ禍を乗り切るため国や県と連携しながら新型コロナウイルスの感染症拡大を収束させ経済及び財政を維持することに注力しなければいけない旨を話しました。

そして来年は市制施行100周年であり、川越市の魅力を発信する記念事業の準備を今こうしたコロナ禍においてもしっかり進めていかなければならない旨を話しました。

それから2050年までに温室効果ガス排出を実質ゼロにするという国の方針に沿い、再生可能エネルギーの導入など環境政策に力を入れていくこと、必要なインフラ、公共施設の整備については社会資本マネジメントの方針に沿いしっかり行うこと。限られた財源、人員で最大の効果を発揮すること。不都合な事態が発生した場合、速やかに報告、相談することなどを話し、職員とともに一步一步着実に川越市民のための施策を今後も進めていきたい旨を伝えました。

これもまた市政方針と同じく、無内容の文言を長々と読むだけのことだ。そして、小林市議の質疑では怒りにまかせて吐いた「国や県が動かないから給食費無償化はやらない」との暴言を軌道修正しないまま、川合市長は「国と県と連携しながら」「感染症拡大を収束させる」などと矛盾かつ具体性が皆無の答弁を開陳する。

具体的な指揮も出来ないのに、おれの言うことは聞けと職員に「話し、伝えた」などとは市職

員を「おれ様の家来」と勘違いしているのではないかと、ヌケヌケと答弁する川合市長に柿田市議は、もはや幼稚園児に「大切なお話」を聞かせるように質疑を重ねた。

柿田市議

私は様々な部署に漠然と仕事をさせてもダメだろうと思います。

特に政策を統括するセクションや管理、明確な方向性、あるいはその判断が大事な部署には、ある程度しっかりした考え方、方向性を持って仕事をしていかなければいけない。職員自身の自覚も非常に重要なセクションがあると思う。

そこで市長の姿勢として、事業の中心的な役割を担う部署に明確な指示を積極的に行った方が良いと考えますけども、市長の考え方をお伺いしておきたいと思います。

川合市長

現在のコロナ化の難局におきましては、平時にも増して市長が先頭に立ってリーダーシップを発揮する必要があると考えております。またいっそう厳しさを増す財政状況に鑑みましても、事業の優先順位などを明確に示していく必要もございまして、そうしたことから必要に応じて、私自ら関係部署に対し、時期を捉えた適切な指示を積極的に行ってまいりたいと考えております。



普通程度の良識と常識を持つ人間なら、これら市長答弁は要するになにも答えておらず、また答える能力が川合市長にはないことがわかるだろう。すなわち、政治を考えてすらいないのである。この市長の口から出る言葉は、すべて「市長屋」としての営業トークに過ぎない。

そして政権批判や自分に対する追及は、「営業妨害」なのだろう。

破綻も見えてきた菅内閣に終わりなきコロナ無策、そんなデタラメな国政に輪をかけて、8割近い市民が見捨てた市長が「おれ様劇場」の独演を延々と続ける川越市。それでも川越市議会はよほど鷹揚なのだろう、一般質問では小林市議、柿田市議を除いて、特に川合市政を追及する姿勢も見られないままだ。まるで「市長屋」と「議員屋さん」が議会という客の来ない店で、閉店時間を待っているだけの様相である。

3月15日には、産業建設常任委員会で「蔵里」議案が持ち出されるが、この流れでは市政100年が呆れる予定調和の4年がまた始まるのだろうか？

そんな予想を覆す次回議会レポートを、本紙自身が期待したい。